



◀ 苫小牧市街地

苫小牧市は、寛政十二年（一八〇〇）武州八王子から、蝦夷地（今の北海道）の警備と開墾のため勇払に八王子千人同心が入植し開墾の跡を入れたのが開拓のはじまりです。

苫小牧市
は
一人なまはら

牧工場が操業を開始すると、バルブ工業を中心に急速に発展、大正八年には一級町村制を施行しました。しかし、二年後の大正十年に市街地の三分の一にあたる千七戸を焼失する大火にあいながらも、たくましい開拓精神を受け継いだ市民の努力で、たちまち復興させ三十年後の昭和二十三年には市制を施行するまでに発展しました。

◀ 苫小牧港



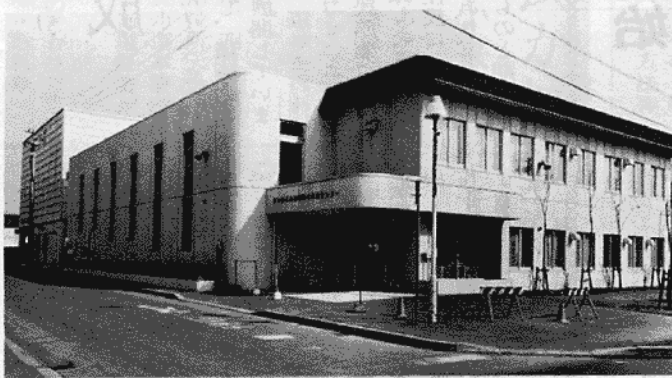
このときの人口は約三万三千人で日光市が昭和二十九年に市制を施行したときと、ほぼ同じ人口規模の市でした。

しかし、昭和三十八年に苫小牧西港が、さらに同五十五年東港が開港するに及んで、アルミニウム工業、石油精製産業、自動車産業、電力などの企業が相次いで進出し、現在では北海道の工業活動の中心的な産業都市に躍進しました。

これに伴って人口も年々急激に増加、今年一月現在で十五万五千人と本市の六倍強になっています。

北海道の中央部に広がる石狩低地帯の南に位置する苫小牧市は、札幌市から南へ六十七キロの距離にあります。面積は、東西三十九・九キロ、南北二十三・六キロ、海岸線三十三・五キロにわたる五百六十二・一平方キロで、日光市の約一・七倍の広さを有しています。

◀ 心身障害者福祉センター



「トマコマイ」の語源

以前、苫小牧川は、海岸線に沿って東流して、現苫小牧港口付近から海に注いでいました。このため苫小牧川が流れる一帯を当時の河川名であったマコマイ（アイヌ語で「山奥に入って行く川」と呼んでいました。

西方には有珠川があったが、これもまた東流して海には直接注がず、沼状となつてマコマイに合流していたため、ト（アイヌ語で「沼」）を上冠し、沼のあつた樽前山神社付近一帯を「沼のマコマイ」の意味で呼び、これが村名の「トマコマイ」になりました。

◀ 文化会館



▶ ハイランドスケートセンター

